

照葉樹林だより

綾の森を世界遺産にする会 会報

第8号

2007年8月20日

綾の森を守る価値とは

てるはの森の会 事務局 石田 達也

それは2002年の晩夏に始まった。綾の照葉樹林を世界遺産にするための署名活動を展開しようとする「綾の森を世界遺産にする会」から、事務局長就任を依頼され、引き受けることにした。

2002年10月から始まった署名運動は、あれよあれよという間に県内はおろか日本国中、そして海外まで広がった。11月末には約14万人もの人々から賛同を貰い、環境省へ提出した。2003年の早春、世界自然遺産候補地検討会が開かれた。一万を超える対象地域の中から「綾の照葉樹林」は最終選考まで残ったが、保護制度が確立されていない、面積が小さいという理由で候補地にはならなかった。

世界遺産にすることが目標であった活動に終止符が打たれたように思えた。「面積が狭ければ、元来の植生に復元する運動に転換すればいい」。綾の森を世界遺産にする会の上野登代表の鶴の一声で大きな転換を迎えることになる。このことについて、上野代表は「照葉樹林の回廊構想」として本にまとめ、事務局は環境省の「環境NGO・NPO／企業の政策提言」に応募し「注目に値する提言」に選ばれた。森を復元し、面積を拡大する、そして保護の制度を整備していけば将来的には世界遺産登録も見えてくるのではないか。照葉樹林を多くの人に知ってもらうために「照葉樹林ガイドボランティア」の養成講座も開始した。

時を同じくして九州森林管理局は、九州のモデルプロジェクト地域として「綾の照葉樹林」に白

羽の矢を立てた。2005年5月、九州森林管理局、宮崎県、綾町、(財)日本自然保護協会、そして「綾の森を世界遺産にする会」が母体となってできた民間の団体「てるはの森の会」の五者が協定を結び、100年の年月をかけた「綾川流域照葉樹林帯保護・復元計画(通称:綾の照葉樹林プロジェクト)」がスタートした。官学民一体となって、分断された照葉樹林を復元することを目的とする。

私は「森」に関する知識も何もないが、この5年間、森に関わって多くのことを学んだ。開発から守ってきた歴史、植生(これはいくら学んでも右から左の耳へ抜けていくが…)、照葉樹林の文化etc…。だが一番心に残ったのは「森は嘘をつかない」という河野耕三先生の言葉だった。人間社会

も森から学ぶことはたくさんある。それを多くの人に伝えたいという気持ちを今も持ち続けている。

照葉樹林を取り巻く環境は時代と共に変化。森の復元プロジェクトに関わる人も多様で、立場や価値観も異なる。開発と自然保護のどちらを優先するのかと

いう考え方の違いもある。しかし、何千年の時を生きる森からすれば、そんな人間たちの動きなど些細な出来事のひとつでしかないのであろう。森の価値とは決して人間が決めるものではない。人間と森とが共に生き延びる社会を作るために大切なものは一体何であろう?そんな答えの出ない疑問を抱えつつもプロジェクトは進行している。まだ始まったばかりである。

(NPO法人 宮崎文化本舗)



大森岳南東稜の尾根探索

高松郁男

森林インストラクターの清藤さんの案内で、大森岳南東稜の尾根探索を楽しもうと云うことになりました。(2007年4月19日)

前日の雨もうそのように晴れ、有志10人が9時過ぎに綾町ほんものセンターを出発、綾北川の竹野集落から大森岳林道に入り、ゲートを開け、昨年補修された林道を登って行きました。途中、掃部岳、式部岳、釈迦岳を展望し、その南斜面のあふれんばかりの照葉樹林の緑はまさしく“眺望絶佳”、人の心を癒します。

一度、大森岳登山口まで登りました。子供の頃、大森岳の北尾根の登山口より登った時のことを思い出しました。ヤマモモの美味しかったことを憶えているので、多分梅雨明けだったのでしょう(70年ほど前の古い話です)。ここから見る高千穂峰は、前日の雪を被り、久し振りに雪山を見ました。その手前の須木のスーパー林道はまるで山林の虫歯の様で、ガケ崩れが心配です。

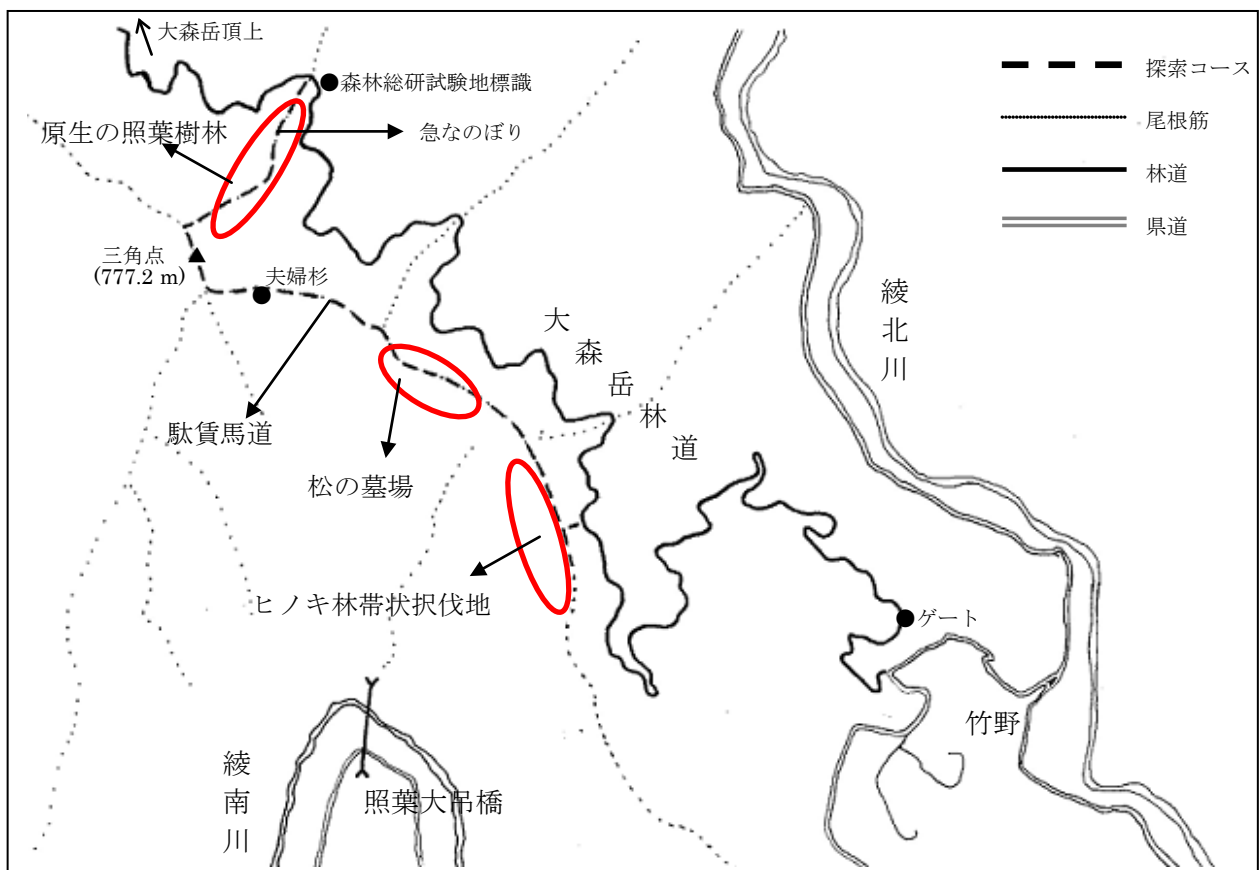
林道を引き返し、森林総研の「常緑広葉樹動態解明試験地」の標識のところで車を降りました。いよいよ今日本番の尾根探索です。清藤さんの先導で大森岳南東稜に向かって急勾配のケモノ道と



夫婦杉の前で

思われる坂を登ること数時間。途中鹿の食害の樹木を見ながら、アカガシの大木、イヌガシ、シロダモ、ツルマサキ、ヒメシャラ、スダジイ、モッコク、モミノキ、マテバシイ、ウラジロガシなど観察しました。

国土地理院の三角点(777.2m)の頂にたどりつきました。老人の肺がパクパクとオーバーヒートしていましたが、力持ちの弟と一緒に心強い限りです。大森岳山頂近くほどではないにしても、か



なりの数のきわだった幹色のヒメシヤラが見られます。不思議なことに、ここから 2km 弱の近くの大吊橋付近では全く見られません。環境が樹木の生育に如何にきびしいかが判ります。

三角点の頂きで昼食をとり、再び尾根のケモノ道を行きますと、樹齢 300 年は経つと云われる夫婦杉がありました。かつて山伏や狩人達が目印に植えたものでしょう。しばらくすると樹々の間からはるか右下に大吊橋とその付近が見えました。

さらにケモノ道を下りていきますと、昔相当に使っていたと思われる林道に出ました。駄賃馬と呼ばれていた労役馬を使い、木材、木炭、その他の荷物を運搬していた林道とのこと。「大正 10 年 奎堂」と記された石碑を発見しました。この里山の人の関り合いの古い歴史がうかがえます。

この尾根辻の奎堂と称した林道と、昨年 12 月 23 日に探索した尾立の旧牧場より川中神社に通じる旧参道は、時代を異にしていますが、綾の人里から山奥に向かって伸びる、山岳信仰と山の幸を得るための山道だったのでしょう。昭和に入って、林業のために綾南川沿いにトロッコ軌道が設置され、次に現在使われている対岸の県道（昔は林道だった）が開通したことを思うと、その時代時代の背景が偲ばれます。

尾根を下る途中に、黒松と思われる大木が無数に横たわり、まるで松の木の墓場のようでした。哀れささえ感じました。これも時代性があるのかもしれない。



松の木が無数に横たわる尾根

しばらく皆黙して歩いていきますと、約 20 年前に林野庁が人工林を等高線に平行に帯状に伐採し、照葉樹林の復元を試みている林に到着しました。20 年過ぎたというのに、未だ樹高 3m 前後で、現在進められている復元プロジェクトの 100 年計画



人工林を等高線に平行に帯状に伐採した後に生育する照葉樹

が心配になりました。昨年 12 月に探索した尾根辻近くの林道を通れば近いのではと思いますので、再度探訪したいものだと思います。

ここから大森岳林道に向かってケモノ道を下山しました。林道のすぐ上の枯れたアカメガシワに、



アカメガシワについたキクラゲ

無数のキクラゲを発見。この山の幸を今夜の酒のつまみにと、喜々として持ち帰りました。おいしかったこと・・・。

大森岳林道に下り立ち、いつもながら、森についての造詣が深い清藤さんに感謝し、参加者皆様の幸せに満ちた顔とお別れしたのは 4 時過ぎでした。天候にも恵まれた楽しい探索行でした。

(新富町在住)

照葉樹林の蝶

宮崎昆虫同好会 小松孝寛

範囲をどこまでにするかで変わりますが、綾の照葉樹林には約 70 種類の蝶がいます。綾北川や綾南川沿いをドライブするとアゲハチョウやシロチョウなどが良く目に付きます。ナミアゲハやモンキアゲハなどはカラスザンショウを主な食樹としています。しかし、カラスザンショウはパイオニア植物の代表的なもので、人為的に開かれた道路沿いや伐採跡地にいち早く進出してくる植物ですから原生の照葉樹林を構成する樹種とは言えません。そのため、道路沿いで良く目に付く蝶には照葉樹林の蝶とは言いづらいものが多いです。

照葉樹林の蝶と言うのはどのようなものでしょうか。蝶は種類によって食樹となる木の種類が決まっていますので、木が分かればどのような蝶が生息しているか類推できます。例えば、クスやタブを食樹とするアオスジアゲハやイスノキを食樹とするヤクシマルリシジミです。照葉樹林の中の溪谷に下りるとアオスジアゲハやヤクシマルリシジミが吸水している姿を見かけます。また、照葉樹林というと 5 月頃の黄金色に輝く風景を思い浮かべますが、この黄金色の花を付ける代表的なものがスダジイとコジイです。スダジイとコジイはブナ科シイ属 (*Castanopsis*) の樹木ですが、蝶に関して言えば同じブナ科でもコナラ属 (*Quercus*) とマテバシイ属 (*Lithocarpus*) の樹木が重要になります。そしてこれらを食樹としているシジミチョウの仲間に、アラカシなどを食樹とするムラサキシジミやシリブカガシとマテバシイを食樹とするムラサキツバメがいます。しかし、これら一見照葉樹林を代表すると思われるアオスジアゲハ、ヤクシマルリシジミ、ムラサキシジミやムラサキツバメは、彼らの食樹であるクス、イスノキ、アラカシとマテバシイが街路樹や庭木として市街地に好んで植えられるようになり、今ではいずれも街の蝶になってしまいました。しかも温暖化の影響を受けてヤクシマルリシジミとムラサキツバメは日本列島を北へと分布域を広げています。

それでは綾の照葉樹林を代表する蝶とは何なのでしょうか。綾の照葉樹林ではスダジイとコジイ

が生えている所よりも標高が高い場所にはアカガシやウラジロガシが生えています^①。アカガシを主な食樹とするキリシマドリシジミは照葉樹林を代表する蝶でゼフィルスと呼ばれているシジミチョウの仲間です。霧島の名前が示すとおり宮崎を代表する蝶の一つでもあり、本州西部から四国、九州に分布しています。アカガシのある谷に入ると、運がよければ雄同士が飛翔する卍を見ることができます。ゼフィルスの卍飛翔はどれも素晴らしいですが、特に大型で翅表の金緑色と翅裏の白色が目立つキリシマドリの卍は圧巻です。見ていると時間が過ぎるのを忘れさせてくれます。

キリシマドリシジミは確かに照葉樹林を代表する蝶ですが、綾の照葉樹林に限ればもっと相応しい蝶がいます。スダジイやコジイが生えている所よりも標高の低いところにはイチイガシが生えています。しかも樹齢が 150 年を超えるイチイガシを含む極相林が湿度の高い溪谷にあり、原生の独特な雰囲気醸し出しています。このような所に生えるイチイガシを食樹としているものにルーミスシジミとヒサマツミドリシジミがいます。



成虫で越冬した後、春、河原で吸水するルーミスシジミ

ルーミスシジミは奈良県春日山では 1932 年に天然記念物に指定された原生の照葉樹林に生息する蝶です。しかし、奈良県では開発が進んだため絶滅し^②、原生の照葉樹林の消滅と共に各地で姿を消しつつある蝶です。このルーミスシジミが綾をはじめとする宮崎県の照葉樹林にはまだ生き続けています^③。とは言っても、極相の照葉樹林に生えるイチイガシを食樹としていますので、県内でも尾

鈴山系矢櫃谷や板谷谷のように極相照葉樹林の伐採とともに急激にその姿を消しました。姿が似ているムラサキシジミやムラサキツバメが二次林や街路樹のアラカシ、マテバシイを好み、街の蝶になって行ったのとは好対照です。

ヒサマツミドリシジミもキリシマミドリシジミと同じくゼフィルスと呼ばれているシジミチョウの一種で、長らく幻の蝶と言われていましたが、1970年にウラジロガシを食樹としていることが明らかにされ、宮崎県でも1971年に霧島山麓のウラジロガシから卵が確認されました⁽⁴⁾。その後、掃部岳や尾鈴山でもウラジロガシから卵が確認されていますが1978年に尾鈴山と大森岳ではイチイガシも食樹としていることが発見され⁽⁵⁾、1983年には尾鈴山系矢櫃谷伐採地の調査から、ヒサマツミドリシジミは宮崎県ではウラジロガシよりもむしろイチイガシを好んで産卵していることが明らかにされました⁽⁶⁾。私もその調査に参加し、採卵したものを羽化させました⁽⁷⁾。もちろん、伐採地の調査ですからこの場所ではヒサマツミドリシジミは死に絶えましたが、綾の照葉樹林のように大きなイチイガシのある溪谷は宮崎のヒサマツミドリシジミにとって絶好の生息地になっています。



産卵のためイチイガシの冬芽ができる秋まで長生きをするヒサマツミドリシジミの♀

もうひとつ忘れてはならない蝶にゴイシツバメシジミがいます。この蝶は湿度の高い極相の照葉樹林に生えているシイ・カシの大木に着生するシシンランのみを食草としています。シシンランは蘭と名前が付いていますがイワタバコ科の着生植物で、照葉樹林の中でも原生林のような限られた場所にしか見られません。ゴイシツバメシジミは1973年に熊本県市房山で発見され、その後、宮崎県の山地でも発見されました。典型的な日華系の蝶で原生の照葉樹林が残るインド北東部、中国揚子江流域、台湾北～中部と日本に生息しています⁽²⁾。国内では紀伊半島中部と熊本県にのみ生息しており、1975年に天然記念物に指定されました。また、

1996年には「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律（種の保存法）」の希少野生動植物種に指定され、厳重な保護活動が取られています。現在、熊本県内では内大臣峡、市房山、白髪岳で生息が確認されていますが、宮崎県では県内で唯一の産地であった小林市西北部県境付近の生息地が1987年夏から翌春にかけて伐採され姿を消してしまいました⁽⁸⁾。綾を含む原生照葉樹の森にはまだ何処かでゴイシツバメシジミが飛んでいると確信していますが、残念ながらその報告はなく、宮崎県ではほぼ絶滅という状況です。



幻の蝶となったゴイシツバメシジミ

綾の照葉樹林を代表する蝶とは、標高の比較的高い所に生えるアカガシを食樹とするキリシマミドリシジミ、標高が比較的低く湿気がある溪谷で圧倒的な風格を漂わせるイチイガシ（一位檜）の多い極相林に棲むルーミスシジミとヒサマツミドリシジミ、そしてそれら原生林に着生するシシンランを食草とし何時かは宮崎で再発見されるであろうゴイシツバメシジミだと私は思っています。これら綾の照葉樹林を代表する蝶たちが増えていくには極相の照葉樹林を増やす必要があります。綾の照葉樹林復元プロジェクトの進展で、22世紀には見渡す限り樹齢150年以上のイチイガシを含む照葉樹林に覆われた山と溪谷が綾を中心に広がっていることを願っています。

(日本鱗翅学会員)

<http://www.7b.biglobe.ne.jp/~seseri/>

<参考文献>

- (1) 河野耕三 みやざきの自然 12号 p94-115 (1996)
- (2) 白水隆 日本産蝶類標準図鑑 (2006)
- (3) 小松孝寛 Butterfly Watching III p136-140 (2004)
- (4) 上田恭一郎 宮崎の蝶 No.6 p1-4 (1971)
- (5) 高崎浩一朗 宮崎の蝶 No.20 p15 (1978)
- (6) 長渡達夫、後藤俊明、児玉重信 タテハモドキ No.18 (1984)
- (7) 小松孝寛 Butterfly Watching I p15 (1992)
- (8) 長渡達夫 宮崎県の生物 p196-201 (1992)

照葉樹林文化シンポジウム と

照葉樹林研究フォーラム が開催されました！

5月26日（土）

～ 照葉樹林シンポジウム ～



照葉樹林ウォーキング

午前 10 時から 2 時間かけて、照葉大吊橋遊歩道第 4 駐車場から川中キャンプ場までの約 4 キロを、照葉樹の巨木を観察しながら歩きました。講師は清藤さんと猪崎さんでした。

照葉樹林の食文化体験

川中キャンプ場で、そばうち、餅つき、野草のてんぷら、竹のこ飯を体験し、皆で楽しく食べました。おいしかった。

森と親しむ時間

前田町長さんのご挨拶があり、上野登先生による「照葉樹林の文化」の勉強会を行いました。ネイチャーゲームでは、森にもっと親しむことができました。参加人数は 70 名でした。

5月27日（日）

～ 照葉樹林研究フォーラム ～

「綾の照葉樹林復元プロジェクト」の人工林を伐採して自然林に戻すという試みは、世界的にも例がなく、参考にできる手本を探すのも難しいのが現状です。学術的な研究成果や林業関係者、地元住民の考えを、関係者が相互に理解し合うことが大切だと認識から、今年初めて、綾の照葉樹林で行われている調査研究の情報交換会を開催しました。話題提供者は 9 名。それぞれ 15 分の発表のあとに、15 分の討議・質問の時間があり、活発な意見交換が行われました。発表の内容を、かいつまんでお知らせします。

ちょっとやってみえること、長～くやって判ること —綾リサーチサイトにおける長期生態観測の紹介—

綾町竹野の集落から大森岳林道を登っていく途中に、原生に近い照葉樹の森があります。ここに、森林総合研究所の調査地「綾リサーチサイト」があります。1989 年から、樹種・木の大きさ・位置・幹の生死・破損状況などを調べています。その成果を、齋藤哲さんがご紹介くださいました。高木・亜高木は 53 種類。イスノキやサカキは幼木が多く老木が少ないので世代交代がうまくいっています。アカガシやタブノキは、毎年のように幼木が育っていません。台風などで林冠の枝が折れて、林床に光が差し込むと一斉に生育するのではないかと考えられています。照葉樹林の全貌を知るには、十数年の研究では足りません。

人工林から自然林への移り変わり —どんな樹木が生えてくるのか—

上記、綾リサーチサイトの近くで、人工林の伐採跡地を放置したら、どのように森林が再生するのかを調べたのが、井上章子さん（東京大学大学院新領域創成科学研究科、現 セイコーエプソン株式会社）です。人工林を伐採すると、その後 10 年以内に成長が早い常緑広葉樹を中心とする先駆群落が育ち、その後は日陰でも育つ樹種が生き残ります。そして、およそ 80 年以内に自然林と同じような森に回復します。先駆群落の優占樹種は、シロダモ、イヌガシ、ユズリハ、シキミでしたが、いずれもシカが好まない種類でした。

針葉樹人工林伐採後の森林再生 —これまでの研究で見えてきたこと—

山川博美さん（鹿児島大学大学院連合農学研究科）は、針葉樹人工林を伐採した後に照葉樹林が再生する具合を調べています。伐採前

に林床に下層植生があると、再生は早くなります。周りの照葉樹林からも種子が散布されてきますが、鳥の餌になるような種子をつける樹木でも、林縁からせいぜい 30m 程度しか散布されません。伐採前に下層植生がない人工林は、照葉樹林の再生を促すために、植栽や播種なども必要かもしれません。それぞれの森に合わせた対策をしていく必要があるでしょう。

綾の照葉樹林における人工林内の林床植生と照葉樹林の復元 綾北川の上流には、曾見川という支流があり、この谷は、綾の照葉樹林プロジェクトの保護・復元対象区域です。朱宮丈晴さん（財団法人 日本自然保護協会）は、この谷の合計 30 箇所の自然林と人工林内の林床植生を比較しました。自然林の下層植生の種数平均は 54.7 種、スギ林は 33.9 種、ヒノキ林は 36.4 種でした。自然林にしか見られない種は 2 種類しかなく、人工林にもわりとたくさんの照葉樹が育っていることがわかりました。しかし、照葉樹林復元のためには、立地条件、自然林からの距離などを考慮して、間伐の方法など、それぞれの場所で最適な方法を検討していかなければなりません。

綾における人工林と自然林保護樹帯の植生比較 植林は山の斜面に行われますが、尾根筋には自然林が残されます。菊池のぞみさん（東京大学大学院新領域創成科学研究科、現 株式会社フジタ）は、このような保護樹帯と、その両側にあるスギ林とヒノキ林の植生を調べました。保護樹帯と人工林の間には、落葉広葉樹の移行帯が形成されていました。照葉樹高木種の実生は、人工林林床に多数見られましたが、明るい林床を好むため、間伐をおこなって林床照度を上げると、成長が促されると考えられます。

宮崎県照葉樹林のキノコ 照葉樹林は、植物や動物だけでなく、分解者である菌類もそろって、はじめて一つの生態系として機能します。黒木秀一さん（日本菌学会会員）は、珍しい照葉樹林のキノコの生態を紹介くださいました。宮崎県内では、これまで 12 種類の発光性のキノコが確認されています。シイノトモシビタケは、照葉樹林を代表する発光性のキノコです。キリノミタケは、カシ類の倒木に発生する照葉樹林のキノコです。材の内部に菌糸を広げ、表面を黒くコーティングして、硬い偽菌核状のものを形成します。すでに 7 年調べていますが、数十年のライフサイクルを解明するには、まだ時間がかかります。

照葉樹林の溪流の流量と水生昆虫 森林には、森と同時に、そこから流れ出る溪流があります。林裕美子さん（綾の森を世界遺産にする会）は、照葉樹林と針葉樹人工林から流れ出る溪流の流量と水生昆虫を比較しました。綾に多数ある溪流の流量を 11 月に一斉に測定した結果、照葉樹林の比率が大きい溪流のほうが流量が多いという結果が得られました。川底の水生昆虫は大きな差がありませんでしたが、流下昆虫数は、照葉樹林の比率が小さい沢の方が多いという結果が得られました。照葉樹林復元にともない、流量を長期観測できる仕組みを提案しました。

「綾川上流緑の回廊モニタリング」の成果 照葉樹林の復元は、保護林を連結する緑の回廊の復元でもあります。山本照光さん（（社）日本森林技術協会）は、この緑の回廊に生息・生育する野生動物調査をなさっています。森林調査と共に行なわれた動物の自動撮影調査では、これまで報告されている地上性の注大型哺乳類のうち、ニホンザルとニホンカモシカを除いて、ほぼすべての種が撮影されました。鳥類は、7 目 21 科 45 種が確認されました。



綾のニホンカモシカとシカとの関係 綾は特別天然記念物であるニホンカモシカの南限地です。西脇亜也さん（宮崎大学農学部）が、カモシカとシカについて行われた調査についてお話くださいました。2003・2004 年度の調査では、10 年前と比べて推定頭数が大きく減少しました。シカの密度は増えていますが、シカ密度が増加すればカモシカ密度が低下するという単純なことではなさそうです。狩猟圧により、シカが禁猟区に逃げ込み、植生を変化させることでカモシカを追い出している可能性も考えられます。カモシカ密度の高い場所では、シカの狩猟を極力避けるなどの配慮が必要でしょう。

「てるはの森の会」事務局から

「綾の照葉樹林プロジェクト」の動き

■ 平成 19 年度 森林（もり）の市（5/12, 5/13）

五月晴れの中、東京で開催された林野庁主催の森林の市に今年も参加しました。宮崎県知事の知名度のおかげでしょうか、昨年以上に多くの方が、ブースに立ち寄られました。間伐材を利用してつくる人形「モックン」作りは子ども達に大人気で、いろんな顔のモックンを親子で楽しそうに作っている姿に、私達も嬉しくなりました。

■ 赤谷（あかや）プロジェクト視察（5/14）

群馬県みなかみ町北部に広がる国有林「赤谷の森」では、(財)日本自然保護協会と関東森林管理局、そして地元の方々が協力し、森を共同管理していく「赤谷プロジェクト」が平成 16 年から実施されています。私たち綾プロジェクトの先輩です。活動フィールドの様子や、運営方法を知るために、現地視察を行ないました。



赤谷の森の玄関口には、「いきもの村」という調研究拠点があります。周辺のコナラ林に囲まれた里山は、炭焼

きなどの材料を供給するとともに、ネイチャートレイルとしての機能も果たしています。また、ボランティアが古い小屋を改装し、管理計画の策定作業や自然観察の研修施設として活用しています。特に興味深かったのは、ワーキンググループを設置している点です。植生管理やモニタリング、環境教育、地域づくりなど複数のグループが活動の実際的设计と実践を行なっています。綾プロジェクトも 3 年目に入り、より実践的な運営方法を構築していく必要があります。今回の視察で得た成果を、早速今年度の事業計画へと反映させていく予定です。



■ 照葉樹林文化シンポジウム 2007（5/26, 5/27）

初日は、照葉大吊橋遊歩道から川中キャンプ場までの県道を散策しました。その後、照葉樹林の食文化体験で自然の恵みを味わい、森とのふれあい

を楽しみました。2 日目は、今回初めての試みとなる照葉樹林研究フォーラムを綾町サイクリングターミナルで開催しました。これまで綾の照葉樹林を中心に行なわれてきた調査・研究の成果の発表と、意見交換を行ないました。綾の照葉樹林について多くの人たちに知ってもらうために、今後も実施していく予定です。（6, 7 ページ参照）

■ 第 6 回連携会議開催（7/19）

協定 5 者により年 2 回開催される「綾の照葉樹林プロジェクト連携会議」の第 6 回が開催されました。平成 18 年度の事業報告と平成 19 年度の事業計画が承認されました。また、新たな組織体制等についても検討が行なわれ、より多くの人々が活動に関わり、事業の実践を進めていくために、ワーキンググループの設置準備を行うことが承認されました。

会員募集中！

「てるはの森の会」では、綾の照葉樹林プロジェクトにご協力いただける会員を募集しております。

年会費	個人サポート会員	2000 円
	家族サポート会員	3000 円
	団体サポート会員	5000 円
	法人サポート会員	10000 円

会員になっていただくと、照葉樹林やプロジェクトに関する情報を掲載した「照葉樹林だより」を年 4 回お届けします。プロジェクトが実施するイベントや各種行事に参加できます。

詳細は下記事務局までお気軽にお問合せください。

綾の森を世界遺産にする会 会報
第 8 号 2007 年 8 月 20 日
発行：綾の森を世界遺産にする会
事務局：てるはの森の会
〒880-0014 宮崎県宮崎市鶴島 2 丁目 9-6 みやざき
NPO ハウス 403 号
TEL 0985-35-7288 / FAX 0985-35-7289
E-mail: teruha@miyazaki-catv.ne.jp
URL: <http://www.teruhanomori.com>

(表紙の写真「綾南川の流れ」 撮影 坂元守雄)

Time for the Trees



世界環境保護団体「オーデマ・ピゲ財団」の設立 10 周年を記念し、日本で初めて支援活動を「てるはの森へ」に対して行います。

オーデマ・ピゲ財団